

梶井基次郎

笥の
話



笥^{かけひ}

の

話

私は散歩に出るのに二つの路を持っていた。一つは溪たにに沿った街道で、もう一つは街道の傍から溪に懸った吊橋つりばしを渡って入ってゆく山径やまみちだった。街道は展望を持っていたがそんな道の性質として気が散り易かった。それに比べて山径の方は陰気ではあったが心を静かにした。どちらへ出るかはその日その日の気持が決めた。しかし、いま私の話は静かな山径の方をえらばなければならぬ。

吊橋を渡ったところから径は杉林のなかへ入ってゆく。杉の梢こずえが日ひを遮かざり、この径にはいつも冷たい湿っぽさがあった。ゴチツク建築のなかを辿たどってゆくときのような、犇ひしひしと迫って来る静寂と孤独とが感じられた。私の眼はひとりでに下へ落ちた。径の傍らには種々の実生みしようや蘚苔せんたい、羊齒しだの類がはえていた。この径ではそう云った矮小わいしょうな自然がなんとなく親しく——彼等が陰湿な会話をはじめるお伽噺ときばなしのなかでのように、眺められた。また径の縁には赤土の露出が雨滴にたたかれて、ちようど風化作用に骨立った岩石そっくりの恰好になっている

ところがあつた。その削り立った峰の頂にはみな一つずつ小石が載つかけていた。ここへは、しかし、日が全く射して来ないのではなかつた。梢の隙間を洩れて来る日光が、径のそここや杉の幹へ、ろうそく蠟燭で照らしたような弱い日なたを作っていた。歩いてゆく私の頭の影や肩先の影がそんななかへ現われては消えた。なかには「まさかこれまでが」と思うほど淡いのが草の葉などに染まっていた。試しに杖をあげて見るとささくねまでがはつきりと写った。

この径を知ってから間もなくの頃、ある期待のために

心を緊張させながら、私はこの静けさのなかを殊に^{しば}屢々歩いた。私が目ざしてゆくのは杉林の間からいつも氷室^{ひむろ}から来るような冷気が径へ通っているところだった。一本の古びた^{かけひ}筧がその奥の小暗いなかからおりて来ていた。耳を澄まして聴くと、^{かす}幽かなせせらぎの音がそのなかにきこえた。私の期待はその水音だった。

どうした訳で私の心がそんなものに惹^ひきつけられるのか。心がわけても静かだったある日、それを聞き澄ましていた私の耳がふとそのなかに不思議な魅惑がこもっているのを知ったのである。その後追いおいに気づいて行

ったことなのであるが、この美しい水音を聴いていると、その辺りの風景のなかに変な錯誤が感じられて来るのであった。香もなく花も貧しいのぎ蘭らんがそのところどころに生はえているばかりで、杉の根方はどこも暗く湿っぽかった。そして筧といえればやはりあたりと一帯の古び朽ちたものをその間に横よこたえているに過ぎないのだった。「そのなかからだ」と私の理性が信じていても、澄み透とおった水音にしばらく耳を傾けていると、聴覚と視覚との統一はすぐばらばらになってしまつて、変な錯誤の感じとともに、訝いぶかしい魅惑が私の心を充たして来るのだった。

私はそれによく似た感情を、露草の青い花を眼にする
とき経験することがある。草叢くさむらの緑とまぎれやすいその
青は不思議な惑わしを持っている。私はそれを、露草の
花が青空や海と共通の色を持っているところから起る一
種の錯覚だと快く信じているのであるが、見えない水音
の醸かもし出す魅惑はそれにどこか似通っていた。

すばしこく枝移りする小鳥のような不定さは私をいら
だたせた。蜃気楼しんきろうのようなはかなさは私を切なくした。
そして深祕はだんだん深まってゆくのだった。私に課せ
られている暗鬱な周囲のなかで、やがてそれは幻聴のよ

うに鳴りはじめた。束つかの間の閃光せんこうが私の生命を輝かす。そのたび私はあつあつと思った。それは、しかし、無限の生命に眩惑げんわくされるためではなかった。私は深い絶望をまのあたりに見なければならなかったのである。何という錯誤だろう！ 私は物体が二つに見える酔っ払いのように、同じ現実から二つの表象を見なければならなかったのだ。しかもその一方は理想の光に輝かされ、もう一方は暗黒の絶望を背負っていた。そしてそれらは私がはつきりと見ようとする途端一つに重なって、またもとの退屈な現実に戻ってしまうのだった。

笥は雨がしばらく降らないと水が涸れてしまふ。また私の耳も日によつてはまるつきり無感覺のことがあつた。そして花の盛りが過ぎてゆくのと同じように、何時の頃からか笥にはその深祕がなくなつてしまひ、私ももうその傍にたたず佇むことをしなくなつた。しかし私はこの山径を散歩しそこを通りかかる度に自分の宿命について次のようなことを考えないではいられなかつた。

「課せられているのは永遠の退屈だ。生の幻影は絶望と重なっている」

——一九二八年二月——

日本文学電子図書館

檸檬

著者：梶井基次郎

制作者：宮澤一郎

出版社：新潮文庫、新潮社

昭和44年8月20日 4刷



日本文学電子図書館